

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長太郎の願ひ書には、自分も姉や姉弟と一緒に、**①** 父の身代わりになつて死にたいと、前の願ひ書と同じ手跡で書いてあつた。

取り調べ役は「まつ」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに気がつかなかった。いちが「お呼びになったのだよ。」と言つた時、まつは初めておそろおそろうなだれていた頭を上げて、縁側の上の役人を見た。

「おまえは姉と一緒に死にたいのだな。」と、取り調べ役が問うた。
 まつは「はい。」と言つてうなずいた。

次に取り調べ役は「長太郎。」と呼びかけた。
 長太郎はすぐに「はい。」と言つた。

「おまえは書き付けに**②** 書いてあるとおりに、兄弟一緒に死にたいのじやな。」
 「みんな死にますのに、私が一人生きていたくはありません。」と、長太郎ははつきり答えた。

「とく。」と取り調べ役が呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、今度は自分が呼ばれたのだと気がついた。そしてただ目を見張つて役人の顔を仰ぎ見た。

「おまえも死んでもいいのか。」
③ とくは黙つて顔を見ているうちに、唇に血色がなくなつて、目に涙がいつぱいたまつてきた。

「初五郎。」と取り調べ役が呼んだ。
 ようよう六歳になる末子の初五郎は、これも黙つて役人の顔を見たが、

20

25

「おまえはどうじゃ、死ぬるのか。」と問われて、活発に**④** かぶりを振つた。書院の人々は覚えす、それを見てほへんだ。

この時佐佐が書院の敷居際まで進み出て「いち。」と呼んだ。
 「はい。」

「おまえの申し立てにはうそはあるまいな。もし少しでも申したことにまちがあつて、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠のことを申すまで責めさせるぞ。」**⑤** 佐佐は責め道具のある方角を指さした。

いちはずされた方角をひと目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申したことにまちがいはございません。」と言ひ放つた。**⑦** その目は冷ややかに、その言葉は静かであつた。

「そんなら今一つおまえに聞くが、身代わりをお聞き届けになると、おまえたちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか。」

「よろしゅうございます。」と、同じような、冷やかな調子で答えたが、少し間をおいて、何か心に浮かんだらしく、「**⑧** お上のことにはまちがいはございません。」と言ひ足した。

⑨ 佐佐の顔には、不意打ちにあつたような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなつた目が、いちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目でも言おうか。**※** 佐佐は何も言わなかつた。

次に佐佐は何やら取り調べ役にささやいたが、まもなく取り調べ役が町年寄に、「御用が済んだから、引き取れ。」と言ひ渡した。

白州を下がる子どもを見送つて、佐佐は太田と稲垣とに向いて「**⑩** 生い先の恐ろしい者でござりますな。」と言つた。心のうちには、**⑪** 哀れな孝行娘の影も残らず、**⑫** 人に教唆せられた、**a** オロかな子どもの影も残らず、ただ氷のように**⑬** 冷ややかに、**⑭** 刃のように鋭い、いちの最後の言葉の最後の一句が反響しているのである。元文頃の徳川家の役人は、もと

35

より「マルチリウム」という洋語も知らず、また当時の辞書には献身という訳語もなかつたので、**⑬** 人間の精神に、老若男女の別なく、罪人太郎兵衛の娘に現れたような作用があることを、知らなかつたのは無理もない。

□(1) 線 a のカタカナを漢字に直して書きなさい。

□(2) 線 ① 「父の身代わりになつて死にたい」とありますが、父の身代わりとなる以外に長太郎が「死にたい」と思う理由を述べている部分を、本文中から書き抜いて答えなさい。

□(3) 線 ② 「書い」の活用形として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 未然形 イ 連用形
 ウ 終止形 エ 連体形

□(4) 線 ③ 「とくは黙つて顔を見ているうちに、唇に血色がなくなつて、目に涙がいつぱいたまつてきた」とありますが、ここにはとくのどんな気持ちが表示されていますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 処刑される父のことを思うと、わが身をすててもよいけれど、母と別れることだけはつらくてしかたのない気持ち。

イ 日頃から姉のいちには特に目をかけられているので、いちの言う通りに死ぬことができるのはうれしい気持ち。

ウ 姉の思いがけない考えのために命を失うことになったが、いざ現実のことになると怖くてしかたのない気持ち。

エ どうすれば自分だけ逃げられるかを考えていたが、幼い身ではその方法も思い浮かばず、悔しくてしかたのない気持ち。

□(5) 線 ④ 「かぶりを振つた」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 頭を少ししかけて、疑問の気持ちを表す。

イ 頭を左右に振つて、不承知・否定をする。

ウ 頭を上下に振つて、承知・肯定をする。

エ 頭を前後に回して、あたりの様子をつかがう。

□(6) 線 ⑤ 「書院の人々は覚えす、それを見てほへんだ」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最も幼い初五郎は、本当は死にたくないという意思表示をしたが、そこには無邪気な本心が表れていたから。

イ 初五郎は、幼くて事情がよくわからないままに、姉のいちよりもさらに強く父を助けてほしいと嘆願したから。

□(7) 線 ⑥ 「佐佐は責め道具のある方角を指さした」とありますが、それを見たいちの心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 見たこともない恐ろしい責め道具を見て、思わず身がすくみ、声もあげられない心情。

イ 恐ろしい責め道具を見せられて、幼い姉弟たちが責められることを思い、耐えられない心情。

ウ たとえ恐ろしい責め道具で責められても、自分の申し立ては揺るがないという一途な心情。

エ これほどのひどい仕打ちをする奉行に対して、子ども心ながら激しく憎み反発する心情。

□(8) 線 ⑦ 「その目は冷ややかで、その言葉は静かであつた」とありますが、このときのいちの心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 見たこともない恐ろしい責め道具を見て、思わず身がすくみ、声もあげられない心情。

- ア 自分たちが父に代わって殺されることを願い出たものの、奉行の佐は全く信用できないという心情。
 イ 自分たちが殺されたあと、奉行が父を助けてくれるのかどうか、確かめる方法を考えようとする心情。
 ウ 父に代わって自分や兄弟が死ぬことを願いつたが、幼い者と思うと悲しくてたまらない心情。
 エ 父の代わりに自分が死ぬことの覚悟を決め、それは少しも動じることもがないという心情。
- (9) — 線 ⑧ 「お上のことにはまちはがいはございませうまいから」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。
 □ ① ここには、いちのどんな思いが込められていますか。それを説明した次の文の [] に入る適切なことばを、「奉行」という言葉を用いて三十文字以内（読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。
 〈子どもたちを殺すのなら、 [] という思い〉
- ② この言葉を聞いた佐佐の心情について、作者が解説をしている一文を本文中から探し、その最初の五字を書き抜いて答えなさい。
 □ ⑩ — 線 ⑨ 「佐佐の顔には、不意打ちにあったような、驚愕の色が見えた」とありますが、これは佐佐の何に対するどのような様子を表現していますか。四十文字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。
 □ ⑪ ※ 「[] に入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。」
- ア しかし イ だから
 ウ ところど エ あるいは
- (12) — 線 ⑩ 「生い先の恐ろしい者でござりますな」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。
 □ ① 「生い先の恐ろしい者」とは、具体的に誰のことを指していますか。その名前を本文中から書き抜いて答えなさい。

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
②								a

- ② この発言は、どのような事実を表していますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。
 ア 子どもたちの処分はまだ決まらなかったこと。
 イ 子どもたちを今すぐ処刑すること。
 ウ いち以外の子どもたちを殺すこと。
 エ いちだけを処刑すること。
- ⑬ — 線 ⑪ 「哀れな孝行娘」とは、ここでは具体的にどのようなことですか。「父」「娘」という言葉を用いて四十文字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。
 □ ⑭ — 線 ⑫ 「人に教唆せられた」とほぼ同じ意味の言葉を、本文中から七字で書き抜いて答えなさい。
 □ ⑮ — 線 ⑬ 「冷やかに」の品詞として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 動詞 イ 形容詞
 ウ 形容動詞 エ 副詞
- ⑯ — 線 ⑭ 「人間の精神に、老若男女の別なく、罪人太郎兵衛の娘に現れたような作用がある」とありますが、この「作用」を本文中ではどのように表現していますか。本文中から漢字二字で書き抜いて答えなさい。
 □ ⑰ 本文の内容に合致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
 ア まつは、殺されるといふ恐怖と奉行の恐ろしい雰囲気や圧倒されて、名前を呼ばれたことにも気づかなかった。
 イ 長太郎は、いちの考えに積極的に賛成し、自ら願ひ書に署名するなど、幼いながらも中心的役割を果たしている。
 ウ とくは、「お前も死んでもいいのか」といふ問いかけに、はっきりと肯定の返事をして奉行への反抗心を燃やしている。
 エ まだ六歳の初五郎は、奉行から問いかけて意味がわからず、思わず姉や兄たちに助けを求めてしまった。

(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)
					①		